

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷九第

行發日一月七年八正大

庭園都市に就いて……………法學博士 田島 錦治

支那投資の國際的共同……………法學博士 戸田 海市

住居税と公平負擔……………法學博士 神戸 正雄

社會政策より觀たる我國の財政……………法學博士 小川郷太郎

人糞尿の國益……………法學博士 財部 靜治

マルクスの唯物史觀に所謂生産の意義……………法學博士 河上 肇

植民地の勞働政策……………法學博士 山本美越乃

ヘンチーの組合社會主義論……………法學博士 河田 嗣郎

明治の米價調節……………法學士 本庄榮治郎

海運と國民經濟……………法學士 小島昌太郎

最近の出産率減少に就いて……………文學士 高田 保馬

マルクスの唯物史觀に所謂生産の意義

河 上 肇

マルクスの唯物史觀に従へば、『人間は彼等の生活の社會的、生産に於て、一定の、必然的の、彼等の意志より獨立したる關係に、即ち彼等の物質的、生産力^{レイブ}の一定の發展階段に適應する所の生産關係に、入り込むものである。此等、生産關係の總和は社會の經濟的構造——法制上及び政治上の上層構造が依つて以て立つ所の、又一定の社會的の意識形態が之に適應する所の、眞實の基礎——を成すものである。物質的生活の生産方法^レは、一般に社會的、政治的、及び精神的の生活過程を條件づける』^{*}されば『人間は新たな生産力を獲得すると共に、其生産方法を變化し、又生産方法を變化すると共に、——即ち彼等の生活資料を得る方法を變化すると共に、——彼等は總て彼等の社會的關係を變化する。……而かも此の如く彼等の物質的、生産方法に順應して其社會關係を建設する所の人間は同時に又、彼等の社會關係に順應して其主義、思想、範疇を作り出すものである。』^{**}換言すれば、生産力——生産關係——經濟組織——法制上及び政治上の組織——精神的文化——此等は皆因果相連り居るものにて、從て又、一旦社會の生産力が變動すれば、之に伴うて生産方法も、生産關係も、經濟組織も、法制上及び政治上の組織も、精神的文化も、相次いで

* Zur Kritik der politischer Oekonomie. Vorwort.

** Das Elend der Philosophie. S. 101.

皆必然的に變動するを免れずといふこと、是れ唯物史觀の名に於て知らるゝ所のマルクスの社會變動觀（歴史觀）の綱領である。之を要するに、社會の生産力の上に起れる變動を以て、社會一切の變動の根本原因と爲す點に於て、マルクスの史觀は明白に一元論の上に立てるものであるが、余は、今此史觀に就て之を茲に詳論せんとするの意志を有する者では無い。只本論に於て問題とせんとするは、マルクスが歴史の一元的動力と爲せし生産力の變動に所謂「生産」の意義如何である。或は生産力と言ひ、或は生産方法と言ひ、或は生産關係と言ふ場合の「生産」の意義如何である。

蓋しマルクス自身は、其史觀を説ける際、所謂生産の意義に就ては、何等特別の説明を加へ居らざるのみならず、「經濟學批判」を公にする前、一八四八年に彼がエンゲルスと共に著したる『生産者宣言』を見る時は、單に生産と言へるに止まる場合もあれど、又生産と云ふ言葉の代りに、生産及び交通と云へる言葉を用ひ居る場合もありて、（註）謂ふ所の生産には果して交通を包含するや否やが、少くとも一の疑問に爲り得るのである。

（註）例へば Produktions= und Verkehrsweise（生産方法及び交通方法）とか Produktions= und Verkehrsmittel（生産手段及び交通手段）とか Produktions= und Verkehrsverhältnisse（生産關係及び交通關係）とか云ふの類が、即ちそれである。而して茲に Verkehr といふ文字は、交易とも譯し得るものなれども、マルクスの原意は交通を指すに止まり、決して交

易の意に之を用ひ居るに非ざることは、余が更に後に明かにせんとする所である。余が舊稿『經濟的唯物史観を論ず』(大正二年『京都法學會雜誌』第八卷九六頁以下連載)の中には、之を譯して交易を爲し居れども、今日より考ふればそれは明白に誤解である。

而して更にマルクス説の祖述者たるエンゲルスの説明を見る時は、問題は益々不明瞭を加ふる感がある。第一に、エンゲルスは屢々生産及び交換なる文字を用ひて居る。例へば彼が一八七八年に公にしたる『デューリング論』*には、彼は次の如く述べて居る。

.....die letzten Ursachen aller gesellschaftlichen Veränderungen und politischen Umwälzungen nicht in den Köpfen der Menschen, in ihren zunehmenden Einsicht in die ewige Wahrheit und Gerechtigkeit, sondern in Veränderungen der Produktions= und Austauschweise zu suchen sind. 總ての社會的變化及び政治的變革の最後の原因は、人間の頭の中に、換言すれば人間が永遠の眞理及び正義に對して抱ける見解の發達の中に、之を求むべきものに非ずして、寧ろ生産及び交換方法の變化の中に求むべきものである。

(註)『共產者宣言』には Produktions= und Verkehrsweise (生産及び交通方法)とありたるに、今やエンゲルスが之を改めて Produktions= und Tauschweise (生産及び交換方法)と爲し居れるは、事細細に似て而かも重要な改變である。

又一八八五年にマルクスの Der achtzehnte Brumaire des Louis Napoleon 第二版を出版する時、エンゲルスが之に添へたる序文の中には、次の如き文句がある。

* Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. S. 286.

Es war gerade Marx, der das grosse Bewegungsgesetz der Geschichte zuerst entdeckt, das Gesetz, wonach alle geschichtlichen Kämpfe, ob sie auf politischem, religiösem, philosophischem oder sonst ideologischem Gebiet vor sich gehen, in der That nur der mehr oder weniger deutliche Ausdruck von Kämpfen gesellschaftlicher Klassen sind, und dass die Existenz und damit auch die Kollisionen dieser Klassen nieder bedingt sind durch den Entwicklungsgrad der ökonomischen Lage, durch die Art und Weise ihrer Produktion und ihres dadurch bedingten Austausch.

マルクスは初めて歴史進行の大法則を發見せし人である。而して其法則とは他なし。曰く、總て歴史上の争闘は、それが政治上、宗教上、哲學上のものなると、將た其他の精神的方面に於て起れるものたるを問はず、總て社會階級の間^に於ける争闘の——或は極めて明瞭なる或は左迄明瞭ならざる——發現に外ならざるものにて、更に又、此等階級の存在及び之に伴ふ争闘は、經濟狀態の發展の程度、其生産及び之によりて條件づけられ居る交換の種類及び方法に依つて決定せらるゝに外ならぬ。

右の一文を見ても、エンゲルスは同じやうに生産及び交換と言つて居る。更に一八八八年（一月三十日）にエンゲルスが『共産者宣言』英譯の序文に記載せる所を見るも、又同じやうに生産及び交換なる文字が用ひてある。

The "Manifesto" being our joint production, I consider myself bound to state that the fundamental proposition which forms its nucleus, belongs to Marx. That proposition is: that in every historical epoch, the prevailing mode of economic production and exchange, and the social organisation necessarily following from it, form the basis upon which is built up, and from which alone can be explained, the political and intellectual history of that epoch;.....

『宣言』は吾々の(マルクス及びエンゲルスの)共同の産物であるから、此宣言の核心と爲れる根本的命題がマルクスに屬することを、余自ら茲に記述し置くの義務ありと考へる。其命題とは他なし、歴史上の各時代に於て、當時行はれつゝある經濟上の生産及び交換の方法、並に必然的に之に伴うて生ずる所の社會組織は、其時代に於ける政治及び思想の歴史が依て以て其上に建設せらるゝ所の基礎であり、又之に依りてのみ始めて説明せらるゝものなりと云ふこと、.....である。

(註) 一八八三年の獨逸版の序文中にある文句は右と少しく相違す。即ち Der durchgehende Grundgedanke des Manifestes: dass die ökonomische Production und die aus ihr mit Notwendigkeit folgende gesellschaftliche Gliederung einer jeden Geschichtsepoche die Grundlage bildet für die politische und intellektuelle Geschichte dieser Epoche;..... (宣言を貫通する所の根本思想は、歴史の各時代に於ける經濟上の生産及び必然的に之に伴うて生ずる所の社會組織は其時代の政治及び思想の歴史に向つて之が基礎を供するものなりと云ふこと、.....である)と記述しあ

りて、生産の文字はあれども、生産及び交通の字は之を發見せず。

又エンゲルスが一八九四年に認めたる書簡の中にも、矢張り次の如く述べてある。

Unter den ökonomischen Verhältnissen, die wir als bestimmende Basis der Geschichte der Gesellschaft ansehen, verstehen wir die Art und Weise, worin die Menschen einer bestimmten Gesellschaft ihren Lebensunterhalt produzieren und die Produkte untereinander austauschen (soweit Teilung der Arbeit besteht).

吾々が社會の歴史の決定的基礎と看做す所の經濟關係なるものは、一定の社會に於ける人々が、其生活資料を生産し、且(分業の成立し居る限りに於ては)其生産物を相互の間に交換するに當つて、探る所の生産及び交換の種類及び方法を意味する。

既に述べし如く、マルクスが『哲學の貧困』及び『經濟學批判』の中に彼自ら其史觀の綱領を書下し居る所には、單に『生産』と云へる文字が使用されあるに止まり、又エンゲルスとの共著に成れる『共產者宣言』にも『生産及び交通』と云へる文字が使用されあるのみである。然るに今エンゲルスが、以上の如く前後を通じて頻りに『生産及び交換』と云ひ居れるは、果してマルクスの眞意に反すること無きや否やに就き、既に疑なきを得ぬのであるが、エンゲルスの主として晩年に於ける解釋は、以上述べたる所よりも更に一步を進めて、甚しく生産なるものゝ意義を擴張して居る。

* Woltmann, Der historische Materialismus, 1900, S. 248.

即ち彼が一八九〇年に認めたる書簡^{*}の中には、次の如き文句がある。

Nach materialistischer Geschichtsauffassung ist das in letzter Instanz bestimmende Moment in der Geschichte die Produktion und Reproduktion des wirklichen Lebens. Mehr hat weder Marx noch ich je behauptet.

唯物史観に従へば、歴史上に於ける最後の決定的要件は、**實、生命の生産及び複、生命である。**これ以上のことは、マルクスも余も曾て主張したことは無し。

猶邇れば、之より六年前一八八四年に『家族の、私有財産の、及び國家の起源』^{*}を公にしたる時にも、其序文の一節に、彼は矢張り次の如く述べて居る。

Nach der materialistischen Auffassung ist das in letzter Instanz bestimmende Moment in der Geschichte : die Produktion und Reproduktion des unmittelbaren Lebens. Diese ist aber selbst wieder doppelter Art. Einerseits die Erzeugung von Lebensmitteln, von Gegenständen der Nahrung, Kleidung, Wohnung und den dazu erforderlichen Werkzeugen; anderseits die Erzeugung von Menschen, die Fortpflanzung der Gattung. Die gesellschaftlichen Einrichtungen, unter denen die Menschen einer bestimmten Geschichtsepoche und eines bestimmten Landes leben, werden bedingt durch beide Arten der Produktion: durch die Entwicklungsstufe einerseits

* Woltmann, a. a. O., S. 240.

** Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats.

唯物史觀に従へば、歴史に於ける最後の決定的要件は、直接生命、生命そのものの生産、及び複生産である。故にそは更に自ら分れて二種となる。其一は生活資料の産出にて、即ち食物、衣服、住居の産出、并に之に必要な道具の産出である。其二は人間の産出にて、即ち種の繁殖である。而して一定の歴史時期及び一定の國土に生活せる人間の社會的制度は、此二種の生産に依り、即ち一方に於ては労働の發展階段に依り、他方に於ては家族のそれに依り、決定せらるゝものである。

右の一文に依りて見れば、エンゲルズが實的生命又は直接生命の生産と謂へるは、人間の生命を維持することであり、又之が復生命と謂へるは、人間の生命の復生産、即ち子孫の生殖のことを指すのである。されば歴史を左右する根本條件なるものは、依然として『生産』なる文字に纏められ居り外見に於ては一元論たるの體裁を具へ居れども、其生産と謂へるは、實は物質的生活資料の生産と云ふよりも、遙に廣義なるものと化し居り、マルクスの史觀の特徴たる一元的性質は全く破壊され了れる譯である。

以上述ぶる所に依つて見れば、マルクスの所謂生産の意義は、彼自身既に何等の説明を下し居

らざるが爲め本來曖昧なるを免れざる上に、殊に彼の意見を祖述せしエンゲルスの説明を参照する時は、益々茫漠たる意義を有するに過ぎざるが如く見ゆるのである。是に於てか、マルクスの所謂『生産』の意義果して如何と云ふことが、彼の史觀を理解するが爲め、最も重要な問題と爲り來るのである。

然らば吾人は此問題をば何に依つて解決すべきやと云ふに、余の考ふる所に依れば、それはマルクスの最後の著述たる『資本』全體の上に現はれたる思想を根據とするの外ない。而して今『資本』を根據として論ずる時は、マルクスの生産の意義は、明かに次の如しと信ずる。

第一、所謂生産の中に消費を包含せざるは、初より疑なき所である。

第二、交通は廣義の生産の中に包含せらる。マルクスに従へば、交通業は Ortsveränderung (場所の變更) としよ Nutzefekt (有用の効果) を生産する所の産業である。現に『資本』第二卷を見る時は、或場所には Produktionsprozess der Transportindustrie (運輸業の生産過程) なる文字あり、* 或場所には Die Transportindustrie bildet einen selbständigen Produktionszweig (運輸業は一個獨立の生産業を形成す) なる文字あり、更に或場所には Der Nutzefekt, den sie (die Transportindustrie) während ihrer produktiven Funktion, also während ihres Aufenthalts in der Produktionsphäre hervorbringen.....(そが(交通業が)その生産的作用を爲せる間に、即ちそが生産領域に滞在せる間

* Das Kapital. Bd. II. S. 29.

** Bd. II. S. 129.

に、齎す所の有用の効果は云々）なる文字もあり。^{*} マルクスが交通を以て生産の一種と認め居れるは明瞭である。さればマルクスが單に生産と言はずして、生産及び交通と言ひし場合（例へば『共産者宣言』に於ける如く）あるは、生産なる文字は往々狹義に解せられ、交通は生産より除外せらるゝことあるが爲めなり、と解釋すべきであらうと思ふ。

第三、交換は明白に生産外のものである。マルクスの資本論を貫通する思想に依れば、物の價値は決して交換に依つて創造せらるゝものではない。従てマルクスは常に Produktionsprozess（生産過程）と Cirkulationsprozess（流通過程）とを對立せしめて居るのである。『資本の一般的形式は G—W—G'（貨幣—商品—貨幣^{*}）である、即ち或價値量は、之より一層大なる價値量を回収せんが爲に流通に放下せらるゝのである。而して此の一層大なる價値量を産出するの過程は、資本家的生産であり、その之を實現するの過程は、資本の流通である』^{**} 即ち一層大なる價値量を産出するは生産過程内のことにて、流通（交換）過程に在りては、只既に産出されたる價値を價格として實現するに過ぎぬ。故にマルクスの意見に依れば、生産と流通（交換）とは全く相違したる性質のものにて、決して混同さるべきものではない。さればエンゲルスが『共産者宣言』にある Produktion und Verkehr（余は之を譯して生産及び交通と爲す、Verkehrを譯して交易又は交換と爲すは誤解なるべし）の文字を改めて、Produktion und Austausch（生産及び交換）と爲せるは、極めて些細のことのやうにて、實

* Bd. II. S. 137.

** Das Kapital, Bd. III., Theil 1. S. 15.

は重大なる改變を謂ふべきであらう。

第四、分配も亦明白に生産外のものである。マルクスの考に依れば、分配關係は生産關係と常に表裏の連絡あるものにて、一定の生産關係の下には必ず一定の分配關係が存在するのである。彼曰く

Betrachten wir übrigens die sogenannten Vertheilungsverhältnisse selbst. Der Arbeitslohn unterstellt die Lohnarbeit, der Profit das Kapital. Diese bestimmten Vertheilungsformen unterstellen also bestimmte gesellschaftliche Charaktere der Produktionsbedingungen, und bestimmte gesellschaftliche Verhältnisse der Produktionsagenten. Das bestimmte Vertheilungsverhältnis ist also nur Ausdruck des geschichtlich bestimmten Produktionsverhältnisses. Die sogenannten Vertheilungsverhältnisse entsprechen also, und entspringen aus, historisch bestimmten, spezifisch gesellschaftlichen Formen des Produktionsprocesses und der Verhältnisse, welche die Menschen im Reproduktion ihres menschlichen Lebens unter einander eingehen. Der historische Charakter dieser Vertheilungsverhältnisse ist der historische Charakter der Produktionsverhältnisse, wovon sie nur eine Seite ausdrücken. Die kapitalistische Vertheilung ist verschieden von den Vertheilungsformen, die aus andren Produktionsweisen entspringen, und jede Ver-

theilungsform verschwindet mit der bestimmten Form der Produktion, der sie entstammt und entspricht.*

吾人をして更に所謂分配關係そのものを觀察せしめよ。勞賃は賃備勞動を前提とし、利潤は資本を前提とする。故に此等一定せる分配の形態は、生産條件の一定の社會的性質、並びに生産参加者の一定の社會的關係を前提とする。されば一定の分配關係は、歴史的に一定せる生産關係の單なる表現である。即ち所謂分配關係は、生産過程の、及び人間が彼等の人的生命の複生産に於て互に入り込む所の關係の、歴史的に決定されたる、特種の社會的形態に適應し、又之より發生せるものである。此等分配關係の歴史的性質は、即ち生産關係の歴史的性質にして、前者は只後者の一面を表現するに過ぎざるものである。資本家的の分配は、他の生産方法より發生せし分配形態と異り、又如何なる分配形態も、そが之より發生し又之に適應する所の、一定の生産形態が消失すると共に消失し去るものである。

此の如く、分配關係は生産關係の表現に過ぎざるものにて、一定の生産關係あれば之に應じて必ず一定の分配關係ありと云ふのであるが、而かもマルクスの意見に依るに、因果の關係に於ては、先づ生産力の變動あり、然る後生産關係の變動あり、而して其生産關係の變動に伴うて分配關係も亦變動すと云ふのであつて、分配は固より生産の外に存在するものである。マルクスが生産力

* Das Kapital, Bd. III., Theil 2. S. 419-420.

と言ひ、生産方法と言ひ、生産關係と言へる場合、其生産なるものに分配を包含し居らざること
に就ては、恐らく多言を要せぬであらう。

第五、マルクスが歴史の一元的動力と爲せる生産力なるものに、果してエンゲルスの言へる如
く、人間の生命の複生産即ち子孫の生殖のことを包含するや否や。之が生産の意義に關する最後
の疑問である。思ふにマルクスは、生産なる言葉をば、極めて廣き意義に用ひ居る場合もある。

例へば『共產者宣言』には『精神上の生産は物質上の生産と共に變化す』など云へる文字がある。乍
併、彼が歴史の一元的動力と爲せるは明かに物質的の生産力である。『經濟學批判』の序にも明かに
『人間は……彼等の物質的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係に入り込むもので
ある』と言つて居る。而してこの所謂物質的生産の中に人間そのものゝ生産(即ち人口の繁殖)を
包含せざるは、殆ど疑なきことである。『資本』^{*}を見る時は、前に引用せし如く、*der Verhältnisse*
welche die Menschen in Reproduktion ihres menschlichen Lebens untereinander eingehen (人間が
彼等の人的生命の複生産 — the reproduction of their human lives — に於て互に入り込む所の關係)
など云へる文字ありて、其外形は如何にもエンゲルスが實的生命(又は直接生命)の複生産と云へ
るに酷似し居れども、而かもマルクスの意味は、人間の生活に必要な貨物の生産を指すに過ぎ
ずして、エンゲルスの意味せる如く子孫の繁殖を指すに非ざるは、前後の關係を見て極めて明か

* Das Kapital, Bd. III., Theil 2, S. 420.

であらうと思ふ。

之を要するに、マルクスが其唯物史観に於て歴史の一元的動力と爲せし生産力なるものは、人間が其生活に必要とせる貨物を造り出す力のことにて、その所謂生産なるものには狹義の生産及び運搬(交通)を包含し、其より狭き意味を有するに非ず、又其より廣き意味を有するにも非ずと信ず。

(附言) 余は大正二年に『京都法學會雜誌』第八卷第六號以下四號に亘りて『經濟的唯物史観を論ず』と題せる拙稿を連載せしことあり。而して茲に公にする所の本論文は、右舊稿の第二節に相當せる部分の修正を目的とするものなれば、既載のものとの重複を免れざる所も少からず。右讀者の諒察を乞ふ。